

# “土地の歴史”を重視した土木遺産の周辺整備計画のイメージコンセプトづくり

- 重要文化財「虹澗橋」を事例として - \*

The Image Concept Making of an Open Space Plan around Historic Civil Engineering Structures Stressing on the “History of Site” - An Important Cultural Property : KOUKAN Bridge - \*

堀川洋子\*\*・伊東孝\*\*\*

By Yoko HORIKAWA\*\*・Takashi ITOH\*\*\*

## 1. はじめに

近年、わが国では歴史的土木施設の文化財評価が進み、そのいくつかは重要文化財に指定された。そして歴史的土木遺産を保存・利活用するため、公園・観光施設など土木遺産をいかした、あらたな整備計画が策定され、周辺整備も試みられている。

土木遺産は、地域の歴史と文化の語り部である。土木遺産をみる人、訪れる人に、技術やデザインに対する感動だけでなく、地域とのかかわりの歴史も土木遺産をとおして感じとってほしい。

本研究では、四段階の計画プロセス「基本構想 基本計画 基本設計 実施設計」にある基本構想の役割に着目した。“形”のデザインに直接むすびつく「デザインコンセプト」の前段階で、遺構や遺物・跡地の残る周辺の土地の歴史を調査し、土木遺産の歴史や地域との関わり、住民の愛着などを浮かびあがらせ、景観や空間から利用者に連想してほしいイメージを記述した「イメージコンセプト」づくりの考え方と手法の提案をおこなう。

先行研究として、著者らによる「土木遺産の周辺整備計画における“土地の歴史”を重視したイメージコンセプトづくり」(土木史研究講演集、2003年)、「“土地の歴史”を重視した土木遺産の保存・利活用計画のコンセプトづくり」(土木計画学第56回年次学術講演会

\*キーワード：親水計画、イメージ分析、計画手法論

\*\*正員、工修、日本大学大学院理工学研究科研究生

(千葉県船橋市習志野台7の24の1、TEL047-469-5572、

yoko\_horikawa@trpt.est.nihon-u.ac.jp)

\*\*\*正員、工博、日本大学工学部社会交通工学科教授

講演概要集、2001年)などがあるが、本稿では、図-1の「研究フロー図」のうち「イメージコンセプトの作成」を中心に述べる。

## 2. 事例の概要

本研究では、平成11年(1999)12月、国の重要文化財に指定され、これを機に地元で河川公園としての「周辺整備計画」がもちあがった虹澗橋を事例にした。

重文指定にともない、文化庁建造物課は、竣工当時の太鼓橋を復元することを提案した。アスファルト路面をはがして竣工当時の切石路面とし、橋は徒歩専用とする。建造物課は、「建造物」という“もの”を扱うので、橋本体の補修や復元については提案するが、周辺の“土地”についての提案はしていない。

大分県三重土木事務所から「虹澗橋周辺整備計画(案)」(以下、「周辺整備計画(案)」)が示され、橋詰駐車場の新設、散策路の新たな開削、飛石橋の新設などが提案された(図-2)。周辺整備計画のコンセプトは、作成されていない。

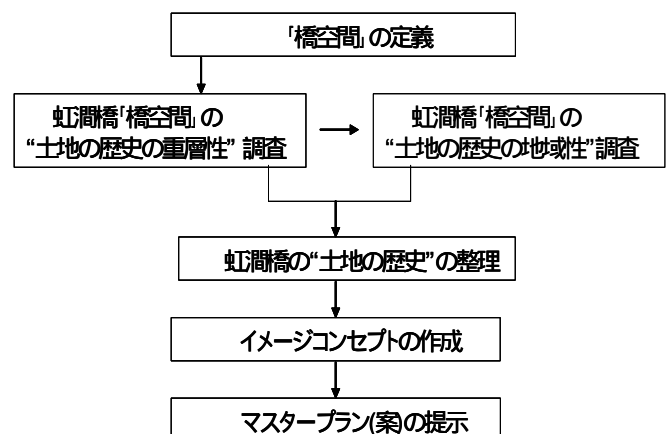


図-1 研究フロー図

### 3. イメージコンセプトの作成

#### (1) イメージコンセプトの作成手順

##### (a) 「地域の区切り線」と「整備計画の範囲」

「地域の区切り線」として三重町・野津町の半円を、「整備計画の範囲」として三重町・野津町にまたがるように“柳井瀬の橋空間”の楕円を描く。

##### (b) キーワードの抽出(図 - 3)

“土地の歴史”の整理(図 - 1の )から、住民の記憶にあるまたは住民が愛着をもち、実際に土地に残る「遺構」「遺物」「跡地」などの事柄を抽出し、キーワード的に配列する。

##### (c) キーワードの分類(図 - 4)

キーワードを“2つの橋”“2本の道”“たまり空間”の3つのテーマに分類した。虹澗橋記・排水溝は“2つの橋”の虹澗橋に、松・馬頭観音像・紅葉並木は“2本の道”の往還に、井ノ子は“たまり空間”の馬宿に含めた。

“たまり空間”は、「橋空間」が地域住民の交流の場であったという“土地の歴史”を継承するために設定した。

##### (d) 「時期の楕円」の記入

周辺整備計画では、「整備の目標時期」が重要である。そこで“柳井瀬の橋空間”に記入したキーワードを、「時期の楕円」で囲む。

架橋以前(図は省略)

「時期の楕円」は、飛石橋・旧道を囲んだ。

竣工当時:幕末(図 - 5)

「時期の楕円」は、虹澗橋・飛石橋・往還・旧道を含む楕円とした。

架橋以後:明治・大正(図 - 6)

「時期の楕円」は、さらに“たまり空間”内の水車・馬宿・魚市場を含むとともに、虹澗橋によって地域がもっとも栄えたので、三重町・野津町の範囲まで広げた。

架橋以後:昭和～現代(図は省略)

「昭和～現代」の「時期の楕円」は、“たまり空間”内の水車・馬宿・魚市場をはずし、店屋を含めた。飛石橋は昭和18年(1943)に流出したので、「時期の楕円」では飛石橋を半分囲んでいる。

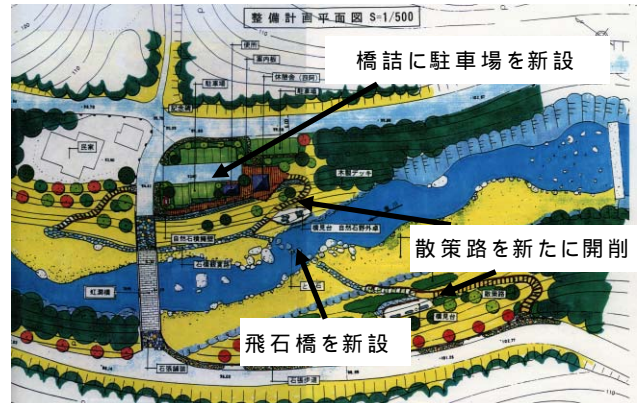


図 - 2 虹澗橋周辺整備計画(案)

大分県『虹澗橋周辺整備計画資料(三重川)』p.1,1999年に加筆

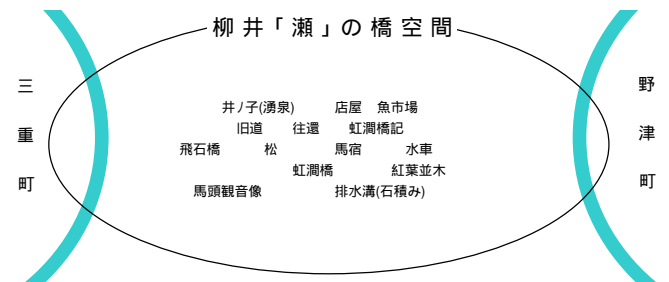


図 - 3 キーワードの抽出

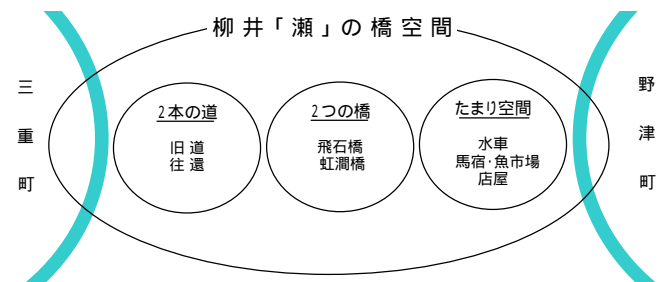


図 - 4 キーワードの分類

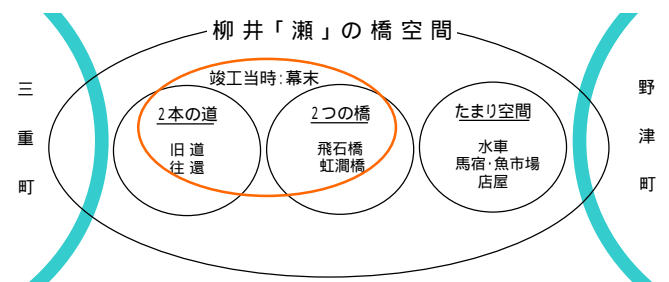


図 - 5 「時期の楕円」の記入 - 竣工当時:幕末

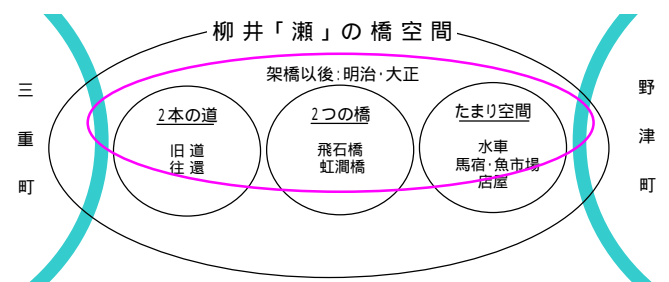


図 - 6 「時期の楕円」の記入 - 架橋以後:明治・大正

## (2) イメージコンセプトの文脈と決定

“柳井瀬の橋空間”には、虹澗橋の架橋以前・以後で2本の道があり、それぞれに飛石橋と虹澗橋の2つの橋が存在した。橋詰や河川敷には、人々が集う“たまり空間”が、時代に応じて現れた。

「時期の楕円」は、明治・大正期がもっとも範囲が広がっていることがわかる。他の時期にくらべ、“たまり空間”を大きく囲んでいるのが特長である。いいかえればイメージコンセプトの「時期の楕円」は、虹澗橋がインフラ施設としてもっとも充実した明治・大正期に大きく広がっている。

そこで「整備の目標時期」を、図-6の架橋以後の明治・大正期とした。すなわち「イメージコンセプト=図-6」とした。

## 4. マスタープラン(案)の提示

イメージコンセプトをもとに作成したマスタープラン(案)を、図-7に示す。ここでは、イメージコンセプト(図-6)をマスタープラン(案)にどのように反映したかを中心に、「周辺整備計画(案)」(図-2)と比較しながら、叙述する。

### (1) “架橋以後：明治・大正”からの提案

虹澗橋の架橋によって地域が栄え、橋空間も賑わい、地域住民が愛着をもった、明治・大正期を「整備の目標時期」とする。

### (2) “2つの橋”からの提案

虹澗橋は、アスファルト路面をはがして竣工当時の太鼓橋に復元する。この時の切石路面までの断面は、地域の歴史を物語る一つのモニュメントとして利用する。

「虹澗橋記」を掘り起こし、水みちの発生を防いで橋を守っていた排水溝は保存整備する。

図-2では飛石橋は虹澗橋の上流に描かれていたが、昔の位置(明治・大正期も同位置)である橋の真下を通るようにした。このようにすると、橋に近づくにつれて変化する橋の姿や石の表情が楽しめ、虹澗橋の真下にくると、キーストーンの1列がアーチ壁面から全

体的に突出している様子や、石組みのあり方などがわかる。橋のあたらしい見方を提案できるとともに、昔の人はなぜここに飛石橋を通したのか、想いをはせることもできる。

図-2の飛石橋の位置は、提案されている位置よりも少し上流に設置することによって、橋下の飛石橋とあいまって川をはさんで回遊性をもたせると同時に、中景としての虹澗橋をも楽しめる。

飛石橋は、2個の飛石を巨大な石(地元の愛称は「長持石」)で支える構造であった<sup>1)</sup>。さらに調査して昔の形状を復元したい。

### (3) “2本の道”からの提案

図-2では、散策路ルートとしてあらたな開削を提案している。われわれのマスタープラン(案)では、明治・大正期にも水車へのアプローチとして利用された旧道の再生整備を提案した。

図-2では「往還」についてふれていないが、明治・大正期の馬匹時代にあった馬頭観音像を、往還脇に保存したい。

### (4) “たまり空間”からの提案

駐車場が予定されていた右岸上流橋詰は、「馬宿」「魚市場」でかつてみられたような賑わいを再現するため、来訪者がお土産などの買い物や情報収集などができる休憩所を設けた。



図-7 マスタープラン(案) (図-2とは方位が異なる)

駐車場は、周辺整備計画区域外へ移した。

図 - 2 ではふれていない河川敷の水車遺構は、三重川や三重町・野津町の「渡り」文化のあらわれでもある。水をひき込んで水車をふたたび動かし、あたらしい“たまり空間”として創造する。

#### (5) “柳井瀬の橋空間”からの提案

図 - 2 を受けて、地元では新虹澗橋をあらたな視点場とするため、河川敷を覆う杉林を伐採したいという意見がみられた。しかしこのようにすると虹澗橋は大きな新虹澗橋に負けてスケールダウンしてしまう。現在の杉林は非常に効果的な遮蔽効果となっており、「橋空間」を独立した歴史的空間にしているため、そのまま保全する。

「橋空間」に植えるあらたな植栽として、地域住民は「紅葉」を提案している。ヒアリングによれば紅葉並木は馬匹時代からあったという。住民がもとめる美しさに歴史的根拠を加えることになる。

## 5. まとめ

周辺整備が計画される土地には、土木遺産の知られざる歴史を物語る遺構や遺物・跡地が残っている場合が少なくない。これら遺構・遺物・跡地の調査がなされずに整備事業が始まると、土地は改変され、歴史の一部が喪失することになる。

一方、これら遺構・遺物・跡地は、うまく活用すれば周辺整備計画の生きた「装置」として利用できる。

本研究は虹澗橋を事例に、虹澗橋「橋空間」の“土地の歴史の重層性・地域性”の調査をおこない、“土地の歴史”を重視した「イメージコンセプト」を作成、かつマスタープラン(案)を提示した。

「イメージコンセプト」では、周辺整備計画の敷地に「架橋以前」「竣工当時」「架橋以後」の遺構・遺物・跡地が点在していたので、「周辺整備の目標時期」を決定する必要が生じた。

建造物文化財では、保存・利活用は、“もの”

の「竣工時期」については論じられるが、“空間(土地)”の「整備時期」については検討されない。

海外事例では、ドイツの産業遺産で、遺産にのこされた変化と発展のプロセスを示す「歴史的痕跡」を残すため、「廃止された時期」を重視した事例が報告されている<sup>2)</sup>。

しかし虹澗橋では、「橋空間」の“土地の歴史”調査から、架橋によって地域が近代化され、「橋空間」が「駅」として賑わい、現在では、「橋空間」に残された遺構や遺物は、地域住民に愛着をもたれていることがわかった。

「橋空間」を訪れる人には、橋の技術やデザインに対する感動だけではなく、橋が地域とかがわった歴史も理解してもらうことが大切である。よって「イメージコンセプト」では、インフラ施設としてもっとも充実した明治・大正期を、重視した。

この過程で、「周辺整備の目標時期」として、次の4類型が考えられることがわかった。

竣工当時、インフラ施設によって「地域が栄えた時期」「空間が賑わった時期」「住民が空間に愛着をもった時期」の3つが一致する時期、ないしは前述した3つの時期が一致しない時期、廃止された時期、である。

今後、これらの4類型について、海外事例を含めて検討するとともに、「イメージコンセプト」の有用性を検証していきたい。

また本研究では、「イメージコンセプト」の考え方だけでなく、作成手順の概略も提示した。今後、さまざまな事例を検討して、実務レベルに対応できるような「イメージコンセプト」の作成手法を提案していきたい。

本稿は、(財)前田記念工学振興財団の平成12年度研究助成をうけ、大分県、三重町・野津町の協力を得て作成した。謝意を表します。

#### 参考文献

- 1) 波津久文芳「三重往来筋柳井瀬渡」私家版, p.12, 1999.
- 2) コーネリウス・ゲッツ「ドイツ・ミューラー織物工場の保存」およびアルフレッド・ゴットファルト「ドイツの鉄道遺産と博物館」『産業遺産』東京国立文化財研究所監修, 大河出版, pp.132-147, 1999.